

大阪のサシバの現状

大西敏一（サシバプロジェクト in 大阪）

1. はじめに

中型猛禽類のタカであるサシバは、近年、日本各地で減少が指摘されています。かつて大阪府ではトビに次いで多いタカでしたが、それも昔の話です。大阪府でも確実に生息数が減少しているのは間違いありませんが、その実情は必ずしも明らかになっていません。そこで「サシバプロジェクト in 大阪」として府下の生息状況を調べてみることにしました。

2. 大阪府における生息状況

大阪府におけるサシバの調査・研究は、1977年～1980年に河内長野市近郊で小島幸彦氏により行われたもの以外ありません。府下全体の分布調査が実施されたこともありませんが、大阪市立自然史博物館の和田岳学芸員により、1990年～1999年までの繁殖期（5～7月）における府下の確認情報をまとめたものが Web 上で公開されています。ただ、2000年以降の情報は蓄積されていないのが実情です。今回、近年の生息状況を把握するため、大阪府のレッドリストに指定された2000年から昨年(2015年)までの各年について、①アセス関連の調査で得られた情報、②野鳥の会に寄せられた情報、③個人の情報、などをもとに調べてみました。その際、渡来後にペア形成をし、繁殖の成否にかかわらず繁殖期を通じて生息が確認されたものを「ペアの生息」と認定し、市町村別に抽出をしました。その結果、2000年から2015年までの16年間で36ペアの生息が確認されました（図1）。30数年前の小島氏の調査では、1地域で4年間に30ペアほどが確認されていたことを考えると、恐ろしいまでの激減状態です。

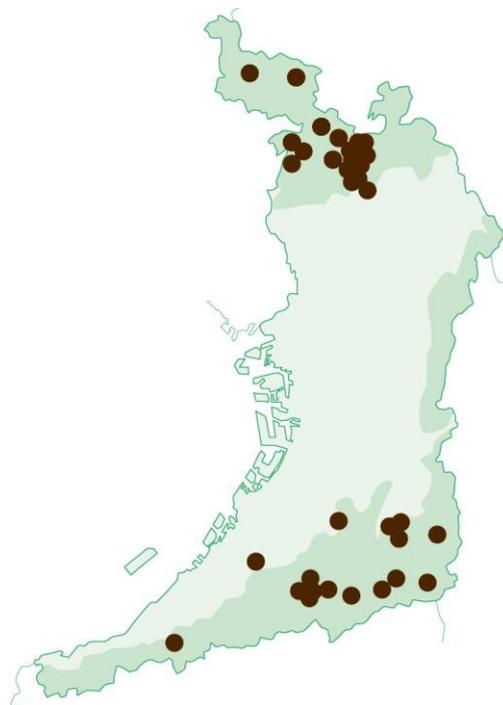


図1 サシバ生息分布図 2000-2015

ペアの分布を見ると北部と南部の地域に二分しているのがわかります。それぞれの地域のペア数は、北部で19ペア、南部では17ペアとなり、当然のことですが、そのほとんどが図の色が濃い部分・山地が存在している地域で確認されています。

両地域を年度別に見たものが表1です。2011年まで南部地域での確認数が少ない原因としては、北部地域に比べて観察頻度の低さ（アセス関連の調査が少なかったこと、同地域を継続的に観察している者がいなかったことなど）が影響しているものと思われます。

市町村別に見たものが表2です。ペアの生息が確認されたのは、8市3町の11地域とな

表1 地域別のペア生息状況

年度 地域	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	ペア数
北部	5	7	6	3	4	6	6	5	4	4	4	4	7	7	7	1	18
南部	1	3			2		3	1	2				2	2	3	3	16
ペア数	6	10	6	3	6	6	9	6	6	4	4	4	9	9	10	4	34

表2 地域別・市町村別のペア生息状況

年度 市町村	北 部				南 部							ペア数					
	豊能郡能勢町	豊能郡豊能町	箕面市	茨木市	堺市	和泉市	岸和田市	泉南市	富田林市	南河内郡河南町	河内長野市						
2000	1	2		2	1												6
2001	1	1		5	1	2											10
2002	1	1		4													6
2003	1	1		1													3
2004	1	1		2						1	1						6
2005	1	1		4													6
2006	2	1		3		2										1	9
2007	1	1		3												1	6
2008	1	1		2												2	6
2009	2	1		1													4
2010	1	2		1													4
2011	1	2		1													4
2012	1	1	2	3				1								1	9
2013	1	1	2	3									1		1		9
2014	1	1	2	3								3					10
2015			1			1					1					1	4
ペア数	2	2	2	12	1	5	1	1	1	1	3		1		4		34

※ 表1・2の縦列のペア数合計が合わないのは、同一ペアが複数年生息しても、ペア数は1としてカウントするため

表3 茨木市のペア生息状況

年度 ペア	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	ペア数
2000			○									○	2
2001			○	○	○						○	○	5
2002	○		不明	不明	×	△					○	○	4
2003	不明		↓	×	↓	×					○	×	1
2004	↓	○	↓	↓	↓	↓					○	↓	2
2005	○	○	↓	↓	↓	↓	△				○	↓	4
2006	○	○	↓	↓	↓	↓	×				○	↓	3
2007	○	○	↓	↓	↓	↓	↓	△			○	↓	3
2008	×	○	↓	↓	↓	↓	↓	×			○	↓	2
2009	↓	△	↓	↓	↓	↓	↓	↓			○	↓	1
2010	↓	△	↓	↓	↓	↓	↓	↓			○	↓	1
2011	↓	×	↓	↓	↓	↓	↓	↓			○	↓	1
2012	↓	↓	○	↓	↓	↓	↓	↓	△		○	↓	3
2013	↓	↓	○	↓	↓	↓	↓	↓	△		○	↓	3
2014	↓	↓	○	↓	↓	↓	↓	↓	×	△	○	↓	3
2015	↓	↓	×	↓	↓	↓	↓	↓	↓	×	×	↓	0

○:繁殖成功 △:繁殖失敗 ×:ペアの生息なし 不明:調査せず

り、その内訳は、北部が豊能郡能勢町、同豊能町、箕面市、茨木市の4地域。南部では、堺市、和泉市、岸和田市、泉南市、富田林市、南河内郡河南町、河内長野市の7地域となりました。それぞれペア数は、豊能郡能勢町2、同豊能町3、箕面市2、茨木市12、堺市1、和泉市5、岸和田市1、泉南市1、富田林市3、南河内郡1、河内長野市5となっています。中でも茨木市が群を抜いて多いのは、幾つかのアセス関連の調査が継続的に行われ、

調査頻度が高かったことが考えられますが、同地域は里山的な本種に好適な生息環境が残っている地域でもあります。また、図1と合わせてみると分かるように、北は高槻市から南は柏原市までがペアのいない空白地域になっています。生駒山系では大阪府側にはサシバが生息せず、奈良県側では生息している状況です。公式な記録によると、空白地域で最後にペアの生息が確認されたのは、高槻市で1992年、枚方市では1999年となっています。

3. ペア減少の理由

表1、2を一見すると途中でペア数の減少があったものの、近年（2014年まで）は増加傾向にあるように見えますが、果たしてそうでしょうか。しかし、どの地域とも押し並べて同じ頻度で調査されていないため、その判断は出来ません。そこで比較的、調査頻度の高い茨木市を見てみることにしました。それをまとめたのが表3です。

同地域では1営巣期で最高5ペア、少なくとも1ペアの生息が確認されていますが、2014年まで継続的に生息していたのは1箇所のみで、あとは単年の生息や数年で途中から確認されなくなっているのが見て取れます。では、何故サシバのペアが飛来しなくなったのでしょうか。

その要因として考えられることは、①開発による環境の改変、②里山環境の衰退、③農業の変化、④オオタカやノスリの進出、⑤人為的圧力、などです。それぞれの要因から受ける影響として、

- ① 道路整備や宅地開発などで営巣地や餌場など生息環境全体、また一部が消失・変化するような大きなインパクトを受ける。
- ② 人のライフスタイルの変化から里山に人の手が入らなくなり（薪炭林がなくなるなど）、餌場が消失するなど生息環境に変化が生じる。
- ③ 圃場整備により餌動物の生息や発生に大きな影響を受け、餌動物が減少する。農薬の使用で餌動物が死滅する。耕作放棄によりカエルや昆虫などがいなくなり、植物の遷移が進むことで餌場として適さない環境になる。転作により水田が畑地に変化することで餌動物が減少し、人の出入りが増えることでサシバの生活に影響が出る。
- ④ オオタカやノスリがサシバの生息環境に進出することで、営巣地の乗っ取りやオオタカによりサシバが捕食される。府下では2000年頃からオオタカの低地への進出が目につき始め、現在ではサシバの生息地に入り込こんだペアも見られる。
- ⑤ カメラマンやバードウォッチャー、各種調査員などが、必要以上に生息地に立ち入ることで生息に影響が出る。

などが考えられます。これらが複合的に絡み合い、サシバの減少につながったと推測されますが、私たちはもう一つの事柄に着目しています。それは③に含まれる内容になりますが、「電気柵・シカ柵の設置」です。

4. 電気柵・シカ柵が与える影響

電気柵・シカ柵は、大抵の場合、水田を取り囲むように畦に設置されます（図2、3）。サシバが水田で餌を取る際は、水田脇の林縁部（時には電柱などの人工構造物）にとまり、目視により畦にいるカエルやトカゲ、昆虫類を見つけ、そこへ降りて捕食します。そのため、畦に柵のような構造物があると降りる際の障害となるうえ、電気柵の細い支柱や縁の

ない金網柵にはとまりにくく、採餌行動を阻害してしまう結果になるのです。また、電気柵に直接触れることにより感電するケースも考えられます。以前、電気柵のある畦に降りた個体が、突然慌てて飛去した場面を観察したことがあります。その電気柵は常態的に通電していたことから、体の一部が柵に触れて感電した可能性があります。その個体は近くで営巣していたペアの雄でしたが、それ以降その場所から忽然といなくなりました。その後、雌も確認されなくなり、最終的にペアが消失してしまったのです。

前述した茨木市は、2005年前後からニホンジカの侵入が顕著になった地域で、それに合わせるように柵の設置が始まりました。私が継続的に観察していたAペアとBペアは、里山的な環境に生息し(図4)、水田を餌場と



図2 シカ柵のある水田(豊能郡能勢町)



図3 シカ柵のある水田(滋賀県高島市)

して利用していました。しかし、柵の設置と同時に水田には来なくなり、餌場を伐開地や林地に変えてしまったのです。その後、Aペアは2008年に飛来しなくなり、Bペアでは繁殖の失敗が続いたのち、2011年から確認されなくなりました。

このように電気柵・シカ柵によるサシバが受けるインパクトは、①採餌行動の阻害、②直接接触による障害、が考えられ、その結果として、餌の狩場が変わるなど生活様式に変化が生じ、場合によっては、そこに生息している個体・ペアがいなくなる可能性があります。特に西日本は、シカやイノシシによる農業被害が多い地域であるため、電気柵やシカ柵の設置数が多く、サシバに与える影響は大きいのではないかと私たちは推測しています。柵の設置による影響は、普通に考えると至極当然のことであるのに、これまで見過ごされてきたのは大変残念だと言わざるを得ません。



図4 Bペア生息地2007年10月(茨木市)

なお、2015年は、前年までペアのいた3ヶ所がどこもいなくなっていました。どこも電気柵やシカ柵との関係性が薄い場所なのですが、理由はよく分かっていません。ただ、猛禽類の繁殖を阻害する要因の一つとして、カラスによる攻撃や卵・ヒナの捕食があり、北部地域でのここ3年間の繁殖が失敗した理由は、すべてカラスによる卵やヒナの捕食で

した。このことから、カラスの影響でペアが来なくなった（定着しなくなった）とも推測されます。

5. 大阪府の生息環境

一般的にサシバは、低地から丘陵の森林に生息し、谷底が水田になっていて周囲を丘陵林が囲んでいる谷津田や谷戸と呼ばれる里山環境が生息場所とされています（図5）。しかし、これは主に東日本における生息環境であり、西日本では少し様相が異なっていることが分かってきています。

図6, 7は大阪府での生息環境の1例です。北部地域では里山的な環境から山地帯に生息しています（図6）。興味深いことは、水田がある場所に生息する個体でも水田には採餌に来ず、伐開地や林地、果樹園、草地、荒地などに餌場を依存していることです。能勢地



図5 一般的な生息環境の里山（高島町）



図6 北部生息環境（豊能郡能勢町）

に
詳しい方の情報によると、10年以上も前から水田には餌を捕りに来ないとのこと。北部地域の水田のほとんどに電気柵やシカ柵が張り巡らされているところを見ると、やはり柵の影響を受けているような気がします。一方、南部地域では急峻な山間部でクマタカと同所的に生息するペアも存在しています（図7）。北陸地方や西日本では、山地帯に生息するケースは普通であり、水田がほとんどない山間部に生息することも珍しくないのです。



図7 南部生息環境（河内長野市）

6. 乾性環境に依存するサシバ

サシバは里山環境に生息し、水田で餌を捕るのが一般的とされていますが、何故、山地帯に生息し、水田があるにも関わらず、乾性環境に依存して生活するサシバがいるのでしょうか。これには次のことが考えられます。

- ① 里山環境が消失したために、山地へと移動した
- ② 水田に餌がない、または捕れなくなったために、餌場を乾性環境へと変えた
- ③ 低地へのオオタカの進出により、生息場所を山地寄りに移動した

④ 元々山地にも生息しており、乾性環境へも適応していた
などが考えられますが、このどれもが当てはまる気がします。

今回分かったことは、大阪府では山地帯にも生息し、水田のような湿性環境よりも伐開地などの乾性環境に依存し、生活しているものが主流だということです。これまで私個人が西日本各地でサシバを観察した実感として、乾性環境に依存する個体の方が多い印象を受けています。サシバは里山を代表するだけのタカではないということです。

7. まとめ

今回、近年における大阪府のサシバの生息状況の実態がおぼろげながら見えてきました。しかし、まだ情報不足は否めず、全容を把握するには至っていません。北部地域は比較的調べられている感がありますが、南部地域はまだまだ調査の余地があると思われれます。

まとめとして、①府下では確実に減少している、②北部と南部の地域に生息している、③北部では数～10 ペア、南部では数～10 数ペア程度が生息すると予想され、府下全体では多くても 30 ペア程度と推測される、④生息環境は純粋な里山ではなく、山地にも普通に生息する、⑤ほとんどは伐開地などの乾性環境に依存して生活している、⑥少なからず電気柵・シカ柵により影響を受けている

などがいえるでしょう。

今後、「サシバプロジェクト in 大阪」としては、現地調査を中心に情報を集め、大阪府のサシバの生息状況をより明らかなものにし、大阪府でのサシバの保全を考えていきたいと思っています。当プロジェクトでは情報の提供と合わせ、活動にご協力いただける方を広く募集しております。よろしく願いいたします。

【謝辞】

今回のまとめにあたり、大阪府南河内農と緑の総合事務所と NEXCO 西日本にはアセス調査での貴重なデータを提供していただきました。また、株式会社 建設環境研究所、株式会社 西日本技術コンサルタント、南大阪野鳥研究会および熊代直生氏、小海途銀次郎氏、小室巧氏、阪上和男氏、高田みちよ氏、納家仁氏、廣田博厚氏、守屋年史氏、山田浩司氏、与名正三氏、和田岳氏、和田信雄氏の皆さまには生息情報や写真の提供をしていただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

(おおにしとしかず、サシバプロジェクト in 大阪)

※ この報告は「都市と自然」2016年3月号に掲載されたものを、著者の許可を得て再録いたしました。